

## 今月の話題 “旗” で渡りルートを解明!

シギやチドリといった鳥をご存じですか。シギ・チドリ類の多くは、繁殖地と越冬地への渡りの途中に、日本へ立ち寄ります。近年、シギ・チドリ類が利用する生息地が開発され、生息数の減少が心配されています。こうした状況の中、山階鳥研が中心となって、双眼鏡や望遠鏡で観察できるプラスチックの小さな旗(フラッグ)を付ける方法で、シギ・チドリ類の渡りルートの解明に成果を上げています。ここでは、シギ・チドリ類に装着しているレッグフラッグについてご紹介したいと思います。

### ○シギ・チドリ類とは…

#### 長距離を渡る鳥

シギ・チドリ類(以下、彼ら)はほぼ世界中に分布し、約220種が知られています。日本では、そのうちの76種が記録され、アジア地域では全体の4割以上の約100種の記録があります。彼らの多くの種類は、北極圏の繁殖地から南半球の越冬地へ、1万キロを超える長距離の渡りをします。彼らが日本に立ち寄るのは、主に春と秋で、渡り途中の栄養補給のためです。

#### 湿地に棲む鳥

シギ・チドリ類は、干潟・田んぼ・河原などの湿地に生活のほとんどを依存して暮らしています。例えば、シギ・チドリ類のことをイギリスではwaders(水の中を歩くもの)、アメリカではshorebirds(海辺の鳥)と呼び、これらの名前には生息地との関係が象徴されています。しかし、彼らの好む湿地は開発の対象にされやすく、世界的な規模で彼らの生息場所が減少しています。このことは彼らの生息数の減少に大きな影響を及ぼしているはずですが、



オーストラリア・ビクトリア州でフラッグを付けられ、新潟県で発見されたミコビシギ 写真提供・雨宮照三さん

### レッグフラッグ付きのシギ・チドリ類を見つけてください

足環の付いた鳥を捕まえてもよいので、誰でもデータ集めに協力できます。観察された方は、種名(わかれ性・齢)・羽数・フラッグの色(わかれ旗録簿用)・観察日時・観察地(緯度・経度)・写真撮影の有無・群れの構成などを山階鳥研・標識研究室へご報告ください。また、シギ・チドリ類のレッグフラッグについて詳しく知りたい方は、パンフレットをご請求ください。



請求方法: 返送用の切手¥80と封筒(送り先明記)を、山階鳥研・標識研究室 茂田研究室までお送りください。

◀各捕獲地でどんなフラッグを付けているのか、報告内容の詳細がわかります。



地図は「シギ・チドリ類のレッグフラッグ」パンフレットより転載



金属足環の上にフラッグが付いている。捕獲した場所によってフラッグの色や組み合わせが違う。⇒写真はトゥネシンの足。オーストラリア・ビクトリア州でフラッグを付けられ、千葉県で発見された。(茂田良光・撮影)

### ○シギ・チドリ類の足に旗を付ける調査とは…

#### 渡りを探る調査

山階鳥研では、1960年代から金属足環を付ける鳥類標識調査を行ってきました。しかし、金属足環だけの調査は再び鳥を捕獲しなければ、彼らの移動は確認できません。そこで考えられたのが、双眼鏡や望遠鏡で観察することができるプラスチックの小さな旗、レッグフラッグによる調査です。

#### レッグフラッグでデータ回収率のアップ

シギ・チドリ類のレッグフラッグは、1991年からこれまでに、オーストラリアや日本などで、すでに5万羽以上に付けられています。フラッグは外国とも協力して、捕獲した場所によって色や色の組み合わせを覚えて付けるので、どこから来た鳥かがわかるようになっていきます。フラッグを付けた鳥のデータ回収率は、足環だけの調査の5~20倍になり、実際に山階鳥研へ報告されるフラッグの観察件数も1995年には約100件だったのが、1996年には200件以上、1997年には300件以上、と年々増えています。

#### 保護をするために必要なこと

長距離を渡るシギ・チドリ類にとって大事なことは、繁殖地や越冬地の渡りの目的地へたどり着くまでに、豊富な餌のある安全な場所を確保すること。ところが、私たちが知っている彼らの情報はとても限られています。例えば、彼らの立ち寄る「中継地」には、わかっていない場所がたくさんあります。越冬地・繁殖地・中継地を総合的に保護するために、彼らの渡りルートを知ることとはとても重要なことなのです。皆さまからの報告がシギ・チドリ類を救うことにつながります。どうぞ、ご協力をお願いします。

シギ・チドリ類のレッグフラッグに関するデータ収集は、日本湿地ネットワークやWWF-Japanの協力を得て行われています。また本紙面で紹介したパンフレットは、WWF-Japanの自然保護基金によって作成されました。